

写真に基づく日本海初記録のホウキハタとオオモンハタ

河野光久

Author & Article Info

山口県水産研究センター（長門市）
 kawano.mitsuhisa.01@pref.yamaguchi.lg.jp

Received 10 May 2021
 Revised 14 May 2021
 Accepted 14 May 2021
 Published 15 May 2021
 DOI 10.34583/ichthy.8.0_11

Mitsuhisa Kawano. 2021. First records of *Epinephelus morrhua* and *E. areolatus* (Serranidae) from the Japan Sea based on photographs. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 8: 11–14.

Abstract

Two species of groupers, *Epinephelus morrhua* (Valenciennes, 1833) and *E. areolatus* (Forsskal, 1775), were captured in the southwestern Japan Sea (Yamaguchi Prefecture) and photographed (specimens not retained). A single individual of *E. morrhua* (383 mm in total length) was collected from northeast of Mishima island, Hagi, on 5 February 2021 and *E. areolatus* (296 mm in total length) from Kawajiri, Yuya, Nagato, on 12 February 2021. The both individuals represent the first reliable record of each species from the Japan Sea.

ホウキハタ *Epinephelus morrhua* (Valenciennes, 1833) とオオモンハタ *Epinephelus areolatus* (Forsskal, 1775) はインド・太平洋に分布する亜熱帯・熱帯性のハタ科マハタ属の魚類で、日本周辺海域では主に南日本の太平洋沿岸および琉球列島から記録されている（瀬能, 2013）。これまで両種の日本海からの記録は、ホウキハタでは見当たらず、オオモンハタでは石川県からの記録（町中, 1980；河本, 2000；河野ほか, 2014）があるが、その内、河本（2000）と河野ほか（2014）の記録は町中（1980）に基づくもので、町中（1980）の報告には証拠となる標本や写真は残されていない。したがって、両種ともこれまで日本海では標本や写真に基づく記録はない。

著者は2021年2月6日に山口県萩市椿東にある山口県漁協萩地方卸売市場で水揚げされたホウキハタ1個体を確認し、全長の計測と写真撮影を行った。さらに同年2月13日に山口県長門市仙崎にある山口県漁協仙崎地方卸売

市場でオオモンハタ1個体を確認し、全長の計測と写真撮影を行った。ここに両個体を証拠写真に基づく日本海初記録として報告する。

材料と方法

ホウキハタ（Fig. 1）1個体は2021年2月6日午前2時30分頃、山口県漁協萩地方卸売市場で著者によって確認された。本個体は前日の2月5日の日中に山口県萩市見島北東約13 km 沖（34°51.6'N, 131°13.8'E）水深約35 mで延縄により漁獲されたものであった。

オオモンハタ（Fig. 2）1個体は2021年2月13日午前5時20分頃、山口県漁協仙崎地方卸売市場で著者によって確認された。本個体は前日の2月12日の日中に山口県長門市油谷川尻地先（34°27.2'N, 130°57.8'E）水深約30 mで釣りにより漁獲されたものであった。

両個体とも、デジタルカメラ（CANON IXY210F）による写真撮影とコンベックスによる全長測定（mm単位）を行った。ホウキハタ採捕時の2021年2月5日の水温は国立研究開発法人水産研究・教育機構が開発した拡張版日本海海況予測システム（JADE2）の採捕海域近傍の格子点（34°52.1'N, 131°14.9'E）の再現データを用いた。また、オオモンハタ採捕時の2月12日の水温は山口県漁業調査船かいせい（125トン）が採捕海域の北西約4 km（34°28.3'N, 130°55.4'E）において棒状温度計（表面水温）とCTD（Sea Bird社SBE19 plus V2, 1 m以深水温）で観測したデータを用いた。

Epinephelus morrhua (Valenciennes, 1833)

ホウキハタ

(Fig. 1)

同定 採捕個体は全長383 mmで、体色が鶯色であること、体側上部に焦げ茶色の4本の斜帯があり、いずれも体軸に対して斜走すること、そのうち前から1本目は眼の後方から背鰭起部にかけて、2本目は鰓蓋後縁上方から背鰭棘部基底中央部にかけて、3本目は鰓蓋後縁から背鰭軟



Fig.1. Photograph of *Epinephelus morrhua* (383 mm total length) captured by longline off northeast of Mishima island, Hagi, Yamaguchi Prefecture, Japan on 5 February 2021.

条部基底前部にかけて、4本目は3本目の斜帯から背鰭第4棘基部直下付近において分岐し、背鰭軟条部基底後端にかけてはいること、および体側下部に焦げ茶色の斑紋が2本の弧状を呈することなどの特徴が、Heemstra and Randall (1993) および畑・本村 (2020) が示した *Epinephelus morrhua* の標徴とよく一致したため、本種と同定された。

本種は背鰭11棘、14–15軟条、臀鰭3棘、7–8軟条、胸鰭17–18軟条、縦列鱗数108–125、側線有孔鱗数55–64を有するが、これらの計数形質はイヤゴハタ *Epinephelus poecilonotus* (Temminck and Schlegel, 1843) およびカケハシハタ *Epinephelus radiatus* (Day, 1868) と重複し、色彩においても両種とは体側に斜帯が入ることで類似している(瀬能, 2013)。しかし、ホウキハタでは体側下部のみ弧状の斑紋を有するのに対し、イヤゴハタでは体のすべての斑紋が弧状を呈すること、およびカケハシハタでは体側に弧状の斑紋がないことで、3種は識別される(Heemstra and Randall, 1993; 瀬能, 2013)。

分布 本種はアフリカ東岸からクック諸島にかけてのインド・太平洋に広く分布する(Heemstra and Randall, 1993)。日本では、伊豆大島、小笠原諸島、相模湾から九州南岸にかけての太平洋沿岸、大隅諸島、トカラ列島、奄美群島、沖縄諸島、瀬戸内海および長崎県五島に分布することが記録されている(座間・藤田, 1977; 瀬能ほか, 1997; Senou et al., 2006; Motomura et al., 2010; 瀬能, 2013; 岡本ほか, 2015; 鎗木, 2016; Nakae et al., 2018; 畑・本村, 2020)。本研究により山口県の日本海からも記録された。

水温 JADE2によれば採捕海域近傍の2021年2月5日の1 m深および50 m深の水温はそれぞれ14.572°Cおよび14.576°Cであった。

備考 本種は対馬暖流域においては、岡本ほか (2015) により長崎県五島から報告されている。なお、彼らの記録の元となった標本は、国立開発研究法人水産研究・教育機構長崎庁舎にSNFR 19499として所蔵されている。岡本ほか (2015) によれば五島市の魚市場では夏から秋を盛期として一年中水揚げが見られるという。しかし、日本海における記録はなかった。したがって、本研究で記載した山口県日本海で採捕された個体の画像は、証拠写真に基づく日本海での初記録である。

本個体の採捕場所近傍の水温は14.5°C台で、複数の熱帯・亜熱帯性魚類の低温致死発生水温の13.6–14.0°C(田名瀬ほか, 1992)をкаろうじて上回っていた。本種は五島近海では一年中見られるのに対し、日本海からの記録が無かったのは、日本海の冬季の低水温が影響していると思われる。

Epinephelus areolatus (Forsskal, 1775)

オオモンハタ

(Fig. 2)

同定 採捕個体は全長296 mmで、尾鰭が截形で後縁が白くふちどられること、体色が淡黄色であること、多数の密集した褐色または黄褐色の斑点があること、最も大きい斑点は瞳孔とほぼ同じ大きさであること、頭部前方の斑点は鰓蓋の斑点よりも小さいことなどの特徴が、Heemstra and Randall (1993)、瀬能 (2013)、および岡本ほか (2015) が示した *Epinephelus areolatus* の標徴とよく一致したため、本種と同定された。

本種は背鰭11棘、15–17軟条、臀鰭3棘、7–8軟条、胸鰭17–19軟条、縦列鱗数97–116、側線有孔鱗数

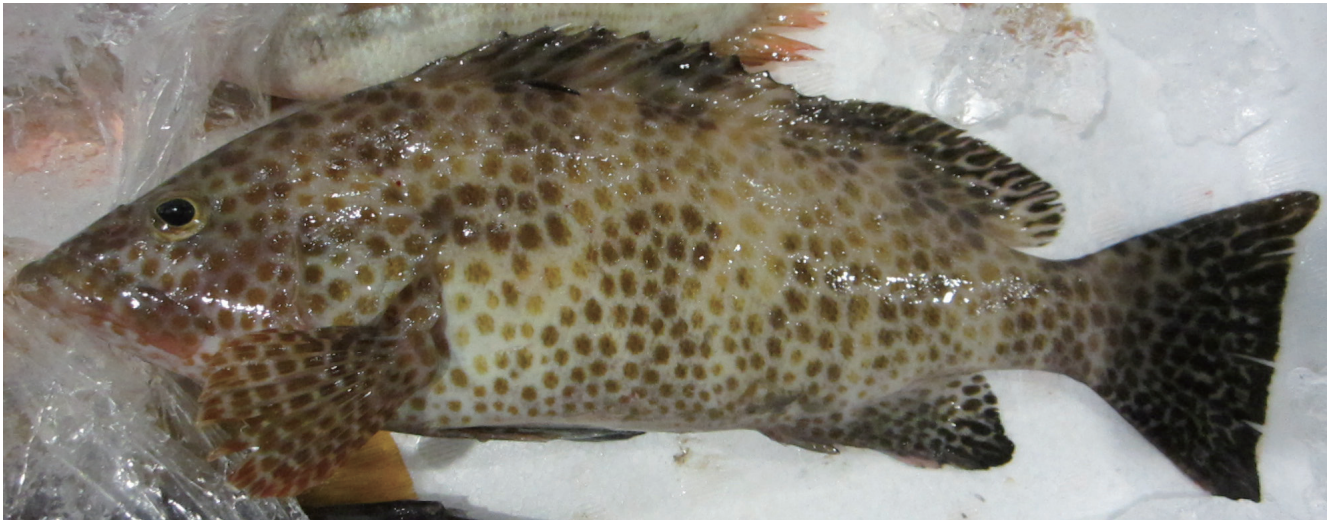


Fig.2. Photograph of *Epinephelus areolatus* (296 mm total length) captured by angling off Kawashiri, Yuya, Nagato, Yamaguchi Prefecture, Japan on 12 February 2021.

49-53を有するが、これらの計数形質はハウセキハタ *Epinephelus japonicus* (Temminck and Schlegel, 1843) と重複し、形態においても両種は尾鰭が截形で、体の暗色斑点が大きく網目模様を形成することで酷似している（瀬能, 2013; Nakamura and Motomura, 2021）。しかし、ハウセキハタでは尾鰭後縁が白くふちどられないのに対し、本種では尾鰭後縁が白くふちどられ、体の斑点がハウセキハタよりも大きく疎らであることで、両種は識別される（Heemstra and Randall, 1993; 瀬能, 2013; 岡本ほか, 2015）。

分布 本種は南アフリカ・ナタール以北のアフリカ東岸からフィジーにかけてのインド・西太平洋に広く分布する（Heemstra and Randall, 1993）。日本では、小笠原諸島、石川県、長崎県野母崎・五島、鹿児島県東シナ海沿岸、千葉県館山から九州南岸にかけての太平洋沿岸、大隅諸島、琉球列島に分布することが記録されている（座間・藤田, 1977; 町中, 1980; 田和・竹垣, 2009; Motomura et al., 2010; 荻原, 2013; 瀬能, 2013; 須之部ほか, 2014; 岡本ほか, 2015; 鎭木, 2016; 伊東, 2018; 公益財団法人鹿児島市水族館公社, 2018; Nakae et al., 2018）。本研究により山口県の日本海からも記録された。

水温 山口県漁業調査船かいせいの観測によれば、採捕海域近傍における2021年2月12日の表面および50 m深の水温はそれぞれ14.6℃および14.76℃であった。

備考 本種は対馬暖流域ではこれまで長崎県野母崎（田和・竹垣, 2009）・五島（岡本ほか, 2015）、韓国済州島（Kim and Song, 2010）および石川県（町中, 1980; 河本, 2000; 河野ほか, 2014）から記録がある。石川県からの記録の内、河本（2000）と河野ほか（2014）の記録は町中（1980）に基づくものであり、町中（1980）では体長30 cmという記載はあるものの、採捕年月日や採捕場所の詳細は不明であり、証拠となる標本や写真も残されていない。したがって、本研究で記載した山口県日本海沿岸で採捕された個体の画

像は、オオモンハタの証拠写真に基づく日本海での初記録である。

本種は薩摩半島南岸・西岸では約10年前から個体数が増えているという情報がある（伊東, 2018; 公益財団法人鹿児島市水族館公社, 2018）。また、五島市福江魚市場では本種は過去にほとんど水揚げされていなかったが、2008年から水揚げ総尾数が右肩上がりに増加し、6年間で2.5倍に増加したこと、および漁獲個体の魚体が大きくなっている可能性があることが報告されている（中川, 2014）。中川（2014）は五島での水揚げ増加の原因について、日本南方の黒潮流域、日本海、東シナ海における海面水温の上昇が影響して、本種の生息域が北方へ拡大した結果、水揚げが増加したと考えている。本個体の山口県日本海沿岸での採捕は、生息域が五島近海からさらに北上しつつある可能性を示唆している。

謝 辞

種の同定に協力いただいた国立科学博物館筑波研究施設分子生物多様性研究資料センターの畑 晴陵博士、文献の収集に協力いただいた石川県水産総合センターの武澤圭剛氏、および原稿を校閲していただいた下関市立しものせき水族館海響館の園山貴之氏に感謝する。

引用文献

- 畑 晴陵・本村浩之. 2020. トカラ列島初記録のハウセキハタとカケハシハタ（スズキ目ハタ科）. *Nature of Kagoshima*, 46: 573–579. [URL](#)
- Heemstra, P. C. and J. E. Randall. 1993. FAO species catalogue. Vol. 16. Groupers of the world. An annotated and illustrated catalogue of the grouper, rockcod, hind, coral grouper, and lyretail species known to date. FAO Fisheries Synopsis 125, 16: i–viii + 1–382, pls. 1–31. [URL](#)
- 伊東正英. 2018. 笠沙で水揚げされる水産重要種. 鹿児島大学総合研究博物館 *NewsLetter*, 43: 8–13. [URL](#)
- 鎭木 紘一. 2016. 種子島の釣魚図鑑. たましだ社, 西之表. 157 pp.
- 河本幸治. 2000. 能都町漁協市場で見られる魚類. 石川県水産総合センター, 2: 41–48. [URL](#)

- 河野光久・三宅博哉・星野 昇・伊藤欣吾・山中智之・甲本亮太・忠鉢孝明・安藤 弥・池田 怜・大慶則之・木下仁徳・児玉晃治・手賀太郎・山崎 淳・森 俊郎・長濱達章・大谷徹也・山田英明・村山達朗・安藤朗彦・甲斐修也・土井啓行・杉山秀樹・飯田新二・船木信一. 2014. 日本海産魚類目録. 山口県水産研究センター研究報告, 11: 1–30. [URL](#)
- Kim, M. J. and C. B. Song. 2010. First Record of *Epinephelus areolatus* (Perciformes: Serranidae) from Korea. Fisheries and Aquatic Sciences, 13: 340–342. [URL](#)
- 公益財団法人鹿児島市水族館公社. 2018. かごしま水族館が確認した鹿児島県の定置網の魚たち. 増訂版. 鹿児島. 335 pp.
- 町中 茂. 1980. 第五節魚類, pp. 373–418, 能登町史編集専門委員会(編)能登町史第一巻資料編. 石川県能登町役場, 能登町.
- Motomura, H., K. Kuriwa, E. Katayama, H. Senou, G. Ogihara, M. Meguro, M. Matsunuma, Y. Takata, T. Yoshida, M. Yamashita, S. Kimura, H. Endo, A. Murase, Y. Iwatsuki, Y. Sakurai, S. Harazaki, K. Hidaka, H. Izumi and K. Matsuura. 2010. Annotated checklist of marine and estuarine fishes of Yaku-shima Island, Kagoshima, southern Japan, pp. 65–248. In Motomura, H. and K. Matsuura (eds.) Fishes of Yaku-shima Island - A World Heritage island in the Osumi Group, Kagoshima Prefecture, southern Japan. National Museum of Nature and Science, Tokyo. [URL](#)
- Nakae, M., H. Motomura, K. Hagiwara, H. Senou, K. Koeda, T. Yoshida, S. Tashiro, B. Jeong, H. Hata, Y. Fukui, K. Fujiwara, T. Yamakawa, M. Aizawa, G. Shinohara and K. Matsuura. 2018. An annotated checklist of fishes of Amami-oshima Island, the Ryukyu Islands, Japan. Memoirs of the National Museum of Nature and Science, Tokyo, 52: 205–361. [URL](#)
- Nakamura, J. and H. Motomura. 2021. *Epinephelus insularis*, a new species of grouper from the western Pacific Ocean, and validity of *E. japonicus* (Temminck and Schlegel 1843), a senior synonym of *Serranus reevesii* Richardson 1846 and *E. tankahkei* Wu et al. 2020 (Perciformes: Epinephelidae). Ichthyological Research, doi: 10.1007/s10228-020-00790-2 (14 Jan. 2021), 68: 263–276 (10 Apr. 2021).
- 中川雅弘. 2014. 魚市場調査からみた五島列島福江島でのハタ科魚類の漁獲動向. 豊かな海, 34:17–20. [URL](#)
- 萩原豪太. 2013. オオモンハタ, pp. 73–74. 本村浩之・出羽慎一・古田和彦・松浦啓一(編). 鹿児島県三島村硫黄島・竹島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島・国立科学博物館, つくば. [URL](#)
- 岡本 誠・星野浩一・島 康洋・野田 勉・堀田卓朗・吉田一範・水落裕貴・中川雅弘. 2015. 長崎県五島市福江島のハタ類フィールドガイド. 独立行政法人水産総合研究センター西海区水産研究所, 長崎. 21 pp. [URL](#)
- 瀬能 宏. 2013. ハタ科, pp. 752–802, 1960–1971. 中坊徹次(編)日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- Senou, H., K. Matsuura and G. Shinohara. 2006. Checklist of fishes in the Sagami Sea with zoogeographical comments on shallow water fishes occurring along coastlines under the influence of the Kuroshio Current. Memoirs of the National Museum of Nature and Science, Tokyo, 41: 389–542.
- 瀬能 宏・御宿昭彦・反田健児・野村智之・松沢陽士. 1997. 魚類写真資料データベース (KPM-NR) に登録された水中写真に基づく伊豆半島大瀬崎産魚類目録. 神奈川自然誌資料, 18: 83–98. [URL](#)
- 須之部友基・川瀬裕司・坂井陽一・清水則雄・望岡典隆・田和篤史・竹垣 毅・中村洋平・出羽慎一. 2014. 地球温暖化と南日本各地における魚類相の比較. 千葉県生物多様性センター研究報告, 7: 3–13.
- 田名瀬英朋・荒賀忠一・太田 満・山本泰司. 1992. 海水魚数種の低温致死限界について. 瀬戸臨海実験所年報, 5: 49–54. [URL](#)
- 田和篤史・竹垣 毅. 2009. 長崎県母崎沿岸の浅海魚類相. 長崎大学水産学部研究報告, 90: 9–18. [URL](#)
- 座間 彰・藤田 清. 1977. 小笠原諸島産魚類目録. 東京水産大学研究報告. 63: 87–138.